

SHOW HEY シネマールーム

★★★★★

僕たちは希望という名の列車に乗った

2018年 / ドイツ映画

配給：アルパトロス・フィルム、クロックワークス / 111分

2019 (令和元) 年 5月 21 日鑑賞

テアトル梅田

Data

監督・脚本：ラース・クラウメ

原作：ディートリッヒ・ガルスカ『沈黙する教室 1956年東ドイツ自由のために国境を越えた高校生たちの真実の物語』（アルファベータブックス）

出演：レオナルド・シャイヒャー / トム・グラメンツ / レナ・クレンク / ヨナス・ダスラー / イザイア・ミカルスキ / ロナルト・ツェアフェルト

👁️👁️ みどころ

1961年に建設された「ベルリンの壁」は多くの悲劇の中で多くの名作映画を生み出したが、その5年前の1956年は？青春群像劇は一般的に楽しいものだが、黒澤明監督の『わが青春に悔いなし』（46年）のように悲しいものもある。しかし、東ドイツの19歳の高校生たちが教室で行った、ハンガリー動乱の死者への“2分間の黙祷”が与えた影響は？

若い時の過ちは一時的で取り返しがつくもの。そう言えばOKだが、さて本作では？原題は『THE SILENT REVOLUTION』だが、大きく意識した邦題に納得！なるほど、こりゃ原作も読んでみなければ・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■イタリアのラース・クラウメ監督と原作者に注目！■□■

ラース・クラウメ監督の『アイヒマンを追え！ナチスがもっとも畏れた男』（16年）（『シネマ 39』94頁）によって、「アイヒマン3部作」「アウシュヴィッツ3部作」が完成した。そして、これによってアイヒマン攻撃の先鋒となったフリッツ・パウアー検事長の名前とラース・クラウメ監督の名前が日本でもすっかり有名になった。しかし、ドイツ生まれではなくイタリア生まれのラース・クラウメ監督が、なぜ、「アイヒマン裁判」の映画を？

そんなラース・クラウメ監督が『アイヒマンを追え！ナチスがもっとも畏れた男』に続いて、本作を監督したのは、ディートリッヒ・ガルスカの原作に興味を抱いたためらしい。1939年にベルリンで生れ、高校生の時に東ドイツから西ドイツにクラスメイトの多くと一緒に逃亡した経歴を持つディートリッヒ・ガルスカの原作は、『沈黙する教室』というタイトルで日本でも発売が決定されたが、それは一体どんな小説？それは、「1956年

東ドイツー自由のために国境を超えた高校生たちの真実の物語。」というサブタイトルをみれば想像がつかうが、1956年という年は、“ベルリンの壁”が建設された1961年よりも5年前のこと。したがって、1956年には、検閲さえ通れば、東ドイツから西ドイツへ「自由に」行けたらしい。また、1956年といえば、ハンガリー動乱が起きた年だが、その時、原作者のディートリッヒ・ガルスカはどこでどんな生活を？

本作では、まずそんな原作に興味を持ったラース・クラウメ監督と、東ドイツ生まれの原作者ディートリッヒ・ガルスカに注目！

■□■時代は？舞台は？学校制度は？■□■

本作の時代がベルリンの壁建設5年前の1956年であることは前述したが、その舞台は東ドイツ。そして、本作の主人公となる、テオ・レムケ（レオナルド・シャイヒャー）とクルト・ヴェヒター（トム・グラメンツ）は、東ドイツのスターリンシュタットにあるクルト・ステフェルパウアー高校に通っている19歳の若者だ。その卒業証書をもることができれば、彼らは東ドイツのトップ大学への進学が可能となるらしい。クルトは父親がエリート階級だから当然この高校に入れたが、父親が労働者であるにもかかわらずテオがこの高校に入れたのは、1953年の東ベルリン暴動（6月17日蜂起）による「改革」のおかげらしい。

したがって、その最終学年の今は2人にとって大切な時期だが、本作冒頭、祖父のお墓参りを理由にクルトはテオと共に列車に乗って西ドイツに入ると、お墓参りはそこそこ、ちゃっかり2人で映画館に忍び込み、西側の映画を鑑賞としゃれこんでいたから、アレ……。そこでは、若者の旅立ちや反抗をテーマにしたアメリカ映画、たとえば、マーロン・ブランドの『乱暴者』や、ジェームズ・ディーンの『エデンの東』や『理由なき反抗』が上映されていたから、さらにアレ……。私が松山で過ごした愛光学園の中高時代にも厳格な校則の中、適当に羽目を外す数名の“不良予備軍”がいたが、ひょっとしてテオとクルトは東ドイツの不良予備軍……？

■□■ニュース映画で観たハンガリー動乱の影響は？■□■

私は中高生の時に『エデンの東』等を観たが、あの時代の、あの状況下にある19歳のテオやクルトがそれを観れば、当然心騒ぐものがあつたはずだ。そんな映画を観て影響を受けた東ドイツの若者たちのその後の生き方にも興味があるが、本作はそれを描くものではない。2人が大きな衝撃を受けたのは、本編の合間に上映されたハンガリー動乱を伝えるニュース映画だった。

報道の自由、言論の自由を求める民主化運動に対して、ハンガリー政府とその後見人たるソ連の対応は？もちろん、テオたちの高校のクラスメイトや東ドイツの多くの国民にとって、それは直接関係のないもの。しかも、彼らはハンガリー動乱を伝えるニュースは、

西側が反革命勢力を応援するためのインチキ情報だと信じていた。しかし、テオやクルト、そしてテオのガールフレンドのレナ（レナ・クレンク）など数名の仲間は、同級生パウル（イザイア・ミカルスキ）のおじさんであるエドガー（ミヒヤエル・グヴィズデク）の家で、法律では禁じられている西ドイツのラジオ局 RIAS の放送を聞くことができたから、東ドイツの一般国民よりは西側の情報に詳しかった。そのため、西ドイツの映画館でハンガリー動乱を伝えるニュースを見た直後に、エドガーの家のラジオで、ハンガリー代表の主将である英雄的なサッカー選手プスカシュが死亡したというニュースを聞くと、大きなショックを受けることに。

■□■ 2分間の黙祷を決行！ その反響は？ ■□■

テオもクルトも19歳特有の冒険はしているが、勉強は真面目にやっているし、政治活動に参加しているわけでもない。ましてや、祖国東ドイツの共産化に反対しているわけでもない。そんなテオとクルトが、ある日教室でみんなに呼びかけたのは、2分間の黙祷。「ハンガリーのために黙祷しよう。死んだ同志のために。」というものだ。それに対して、「気は確かか？」と真正面から反発したのはエリック・パビンスキー（ヨナス・ダスラー）。それに対しては、テオもクルトに加勢して「ソ連は撤退すべきだ！」と反論し、議論になりかけたが、授業開始前だから、それ以上の議論はムリ。そこで民主的に多数決で決めようとなったが、その結果は20名中12名が黙祷に賛成したから、本作導入部ではその決行シーンに注目！

黙祷といっても、私たち日本人が普通に行うような、目を閉じて一切しゃべらない黙祷ではなく、彼らが行った黙祷は、教師から何を言われても2分間は何も答えないことだ。最初の生徒が、与えられた質問に答えられないのは仕方ないとしても、次に指名した生徒は？ 更にその次は？ その次は？ 生徒たちのそんな態度＝反抗にキレてしまった教師が、シュヴァルツ校長（フロリアン・ルーカス）に怒りをぶつけたのは当然だが、さあ、学校側の対応は？ 校長は、来春に卒業試験を控えている生徒たちのために、コトを穏便に済ませようとしたが、郡学務局の女性局員ケスラー（ヨルディス・トリーベル）が調査に乗り出してくると、事態は次第に深刻に。「黙祷に政治的意図は全くなく、大好きなサッカー選手プスカシュへの哀悼のため」と生徒たちは意思統一して、ケスラーの個別の聞き取りを逃れようとしたが、東ドイツ側の新聞でプスカシュの死亡はRIASの誤報だったことが明らかになると、プスカシュの「死亡」をどこで知ったのか、と追及されることになったのは当然だ。

そんな推移の中、テオに訓告処分が下され、製鉄所で働くテオの父親ヘルマン（ロナルト・ツェアフェルト）は「次は退学だ」と警告を受けることになったが、事態はこれで収まるのだろうか・・・？ この聞き取り調査の中ではケスラーの鋭い質問が目につくが、テオやクルト、そしてレナたちクラスメイトの対応もそれなりにすごい。立場の違いや見解

の違いは別として、彼らの団結ぶりにもしっかり注目したい。

■□■なぜこんなにリアルに？それは体験に基づく実話だから■□■

本作の邦題は『僕たちは希望という名の列車に乗った』と大きく「意識」されているが、原題は『THE SILENT REVOLUTION』。しかし、「沈黙」だけで革命が起こせるなら楽なもので、現実にはフランス革命にしてもロシア革命にしても大量の血を流したが、原作者のディートリッヒ・ガルスカにとっては、「2分間の黙祷」という沈黙がまさに「THE SILENT REVOLUTION」だったらいい。つまり、2人の主人公を中心とした本作の物語は、1939年生まれ原作者ディートリッヒ・ガルスカが、1956年にクラスメイトたちと共に行った2分間の黙祷が、あまりにも大きすぎる反響を呼び、その結果家族と別れて東ベルリンから西ベルリンに逃亡せざるを得なくなった、自らの体験談をまとめたものなのだ。

なるほど、そのためテオやクルトはもとより、クラスメイトたちそれぞれの個性や、その中で議論の姿、さらには事情聴取の中で展開される密かな目配せや、レナを巡るちょっとした恋のさや当て(?)等がこんなにリアルに描かれているわけだ。ちなみに、私の中高時代のクラスは、今年5月15日に松山で70歳記念同窓会を開催したが、ディートリッヒ・ガルスカのクラスでは、40年後に同窓会が開かれたらしい。日本で出版される『沈黙する教室』では、映画では描かれなかった、彼らの亡命後の西ドイツでの出来事から、40年後の同窓会での再会までが描かれているそうだから、ぜひそれを読んでみたい。

もっとも、それを知ったのは本作を鑑賞した後のこと。今、スクリーン上はテオの訓告処分で小康状態のように思えたが、何の何の！2分間の黙祷に対する当局の調査は更に続き、ある日学校に乗りつけてきた黒塗りの高級車からは、人民教育相のランゲ（ブルクハルト・クラウスナー）が降り立ち、直々に教室に入ってきたから、事態は更に大変なことに。さあ、ランゲによる、テオやクルトたちの「理由なき反抗」に対する追及はいかに・・・？

■□■父親の葛藤はそのまま子供たちに！■□■

本作はテオとクルトが主人公だが、その父親の立場の差が強調されている。つまり、クルトの父親はエリート官僚だが、その妻の父親はナチスの墓に眠っていたため、父親は息子のクルトがその墓参りに行くことを嫌がっていた。他方、テオの父親が働いている鉄工所はかなり労働条件が厳しそうだから、父親は息子がそんなところで働くことなく大学に入ることができれば万々歳だと考えていたから、テオが訓告処分を受けたことが大ショック。このように、1956年の東ベルリンで高校生活を送る高校生たちは、第二次世界大戦時代を生きた父親たちが持つそれぞれの葛藤を、テオやクルトと同じようにそのまま受け継いでいたようだ。

あの2分間の黙祷の提案に最初に反対したのはエリックだったが、それは、彼の死亡し

た父親はあの戦争の中である英雄的な死を遂げたと母親から教えられ、それを誇りとして生きていたためだ。しかし、ケスラーの調査だけでは黙祷の首謀者が明らかにならないため、人民教育相が直接乗り出してくると、その調査（質問）は過酷を極め、密告や仲間割れを狙った質問もあれこれと。さらに、テオの父親に対して「次は退学だ」と警告が下されたのは当然だが、エリックに対して人民教育相は彼の父親の死亡にまつわる秘密情報を示し、その不利益な情報を開示されたくなければ首謀者を吐け、とせまってきたから啞然。テオやクルトたちに RIAS のラジオ放送を聞かせていたエドガーに手入れが入り、逮捕されたのも当然だ。

人民教育相の最後の脅しは、首謀者を明らかにしなければクラス全員の卒業資格を剥奪するというもの。そこまで言われると、クラスの一人一人は大切な友を密告して大学へ入学するのか、それとも信念を貫いて労働者となるのかという究極の選択迫られることに……。そして、ほとんど気が狂ったようになったエリックは、あっと驚く暴走行為に及ぶことに……。

そんな極限状態の中、テオとクルトの決断は？そしてクラスメイト達の決断は？なるほど、「僕たちは希望という名の列車に乗った」とはそういう意味だったのか……

2019（令和元）年5月28日記